

現場突撃型ローカルマガジン

ながもの がた 4

派手じゃないけど、地味にいい。

スタンプを押した日から。

～私視点の移住記録～

おひるごはんを持って、ふらっと集まる。

～持ち寄りランチ会～

座って過ごすだけじゃない。

～元気な声が聞こえる、「ころばん塾」～

今日も、誰かが扉を開ける。

～南加茂台で、まちの人を迎える美容室～

中田書店のせっちゃんに聞く、ながもだいの始まり

スタンプを押した日から。

まだ観光客の顔で、

スタンプを押した

二〇二四年十月。はじめて加茂駅に降りた日、改札前にあったスタンプを押した。

そのときは、
「せっかくひやける押しとこ。」
広島井

かなりの気持ちだった。でも今見ると、このまちで暮らし始めた日の印みたいに見える。スーパーの場所もバスの時間も、まだ何もわからなかった日。私の木津川市での生活は、あのスタンプから始まっていた。



車なし生活、地味に修行

移住してしばらく、私は車を持っていなかった。地方で車なし。普通に考えたら、結構きつい。でも、車なしの生活は、それなりによかった。

最初の半年間は、ゆかさんが自転車
を貸してくれていた。駅へ向かうとき
も、ちょっとそこまでの移動も、その
自転車に助けられた。ただ、スーパーや
ドラッグストアをはしごするときは、
歩いて行くことが多かった。買い物袋を
持つて、次の店へ向かう。また買い、また
重くなる。

「なんでこんなに買ったんじやろ。」
広島井

安いものを買に行ったはずなのに、
帰り道は、なぜか修行みたいになっている。
この道を行けば家に帰れる。でも、この道、
思ったより長い。歩いた分だけ、まちが
自分の生活の中に入ってきた。

「乗っていき」を、いったん疑う

大阪に住んでいたときは、歩いて帰るのなんて当たり前だった。歩ける距離なら歩くし、電車に乗れば、だいたい次の電車がすぐ来る。車を持っていない人も多かった。そういう身軽な感じが、なんかスマートに見えて、少し憧れていた。でも、木津川市に来てからは、車なしの意味が少し変わった。電車やバスは、すぐに来るとは限らない。駅で待つか、歩いて帰るか。そう考えても、歩いて帰るには遠い日がある。大阪で思っていた「車なし」と、ここでの「車なし」は、少し違っていた。

そんなときに、

「送るか？」

「迎えに行くで。」

「駅まで乗っていき。」

って言うってもらったことがあった。ありがたい。めちゃくちゃありがたい。でも、毎回ちょっと申し訳ない。

「いや、大丈夫です。」

「歩いて帰ります。」

そう言いながら、結局そのやさしさに甘えて、乗せて帰ってもらったこともある。

私視点の移住記録

ただ、内心ちょっとビビっていた。大阪の言葉には少し慣れていた。でも京都には、京言葉というものがある。これは本当に「乗っていき」という意味なのか。それとも、何か裏の意味があるのか。考えすぎだとは思う。でも、移住してきたばかりの私は、京都の言葉を聞くたびに、まだいちいち構えていた。

今は、ありがたい縁があつて、車のある暮らしになった。荷物が多い日も、雨の日も、前よりずっと楽になった。便利。本当に便利。でも、車なしで過ごした時間は、ちゃんと心の中に残っている。車で通りすぎる道にも、歩いていた頃の自分がある。

今も少しだけ



JR 加茂駅改札内に。
スケジュール帳に押した駅スタンプ。



田んぼって、音がするの？

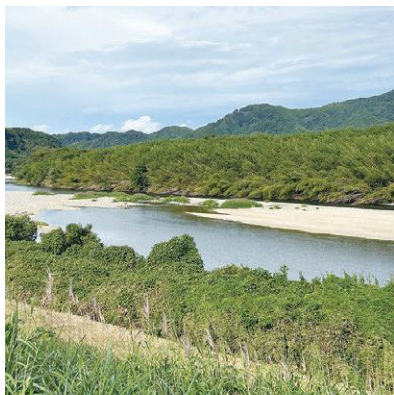
心に余裕のある日は、木津川沿いを歩いた。何か大きな目的があるわけではない。ただ、歩くだけ。

私の地元は、広島県尾道市。海のそばで育ったこともあり、田んぼはあまり身近ではなかった。だから木津川市に来て、歩いている途中に田んぼがあることが新鮮だった。

夕方になると、カエルの声が聞こえる。
「あ、田んぼって音があるんじゃない？」
広島弁

そんなことを思いながら歩いた。川の音とか、風の音とか、鳥の音とか。たぶん、誰かに説明すると、「それだけ？」

って言葉それな音。でも、そのときの私には、なんか残しておきたい音だった。



◀木津川



大阪へ行って、加茂へ帰る

最初の半年間は、大阪の大学に通いながら、木津川市で地域おこし協力隊の仕事をしていた。朝は大阪へ向かい、夕方は木津川市へ戻る。そのあいだを、毎日電車で行ったり来たりしていた。加茂駅は始発駅なので、朝は座って大阪方面へ向かえる。人の多い大阪へ向かう朝に、必ず座れる。帰りは、終点まで乗っていれば加茂に着く。これは、通ってみて初めてわかった加茂駅のありがたさだった。夕方、加茂駅の改札を出たとき、

「あ、帰ってきた。」

と思う日があった。まだ移住して少ししか経っていないのに、もうそんなふうにいる自分がいて、ちょっと不思議だった。

坂道をのぼった先に、景色がある

春になって、南加茂台にある坂道をのぼった。坂があるとは聞いていた。聞いてはいたけど、実際にのぼると、結構きつい。これはもう、暮らしという名の筋トレ。息を切らしながら坂をのぼる。でも、のぼりきった先で見える景色はきれいだった。山の空気が澄んでいて、まちが少し遠くまで見えて、

「ああ、景色がいいな。」

と思った。きつい。でも、景色で癒される。

南加茂台の坂道への感情は、だいたいこの二つでできている。



△南加茂台小学校前の坂道

加茂駅で、ほっとするようになった

私は今でも、休日に旅へ行くことが多い。知らない駅で降りるのが好きだし、知らない道を歩くのも好きだ。でも、旅行から帰ってきて加茂駅に着くと、少し安心するようになった。

あの日、旅の記念のために押した駅スタンプ。その場所が、いつのまにか、帰ってくる場所になっていた。移住って、もっと大きな決意とか、はっきりした変化のことだと思っていた。でも実際は、同じ駅に何度も降りて、同じ道を何度も歩いて、同じ坂に何度も息を切らして、少しずつ二こで暮らしている感覚が増えていく。

スケジュール帳に押した、加茂駅のスタンプ。今見ると、あの日の自分がちゃんと残っていて、なんかいいなと思う。



おひるごはんを持って、 ふらっと集まる。



持ち寄りランチ会

山城ガスセンター
いづつや

お昼ごはんを持って、同じテーブルを囲む。
何かをしなければいけないわけでも、特別な目的があるわけでもない。
ただ、そこに来て、ごはんを食べて、少し話す。
そんな気軽な時間が、南加茂台のまちの中に生まれました。

ごはんの時間が、

まちの入口になる

南加茂台にある「山城ガスセンターいづつや」で、持ち寄りランチ会が開かれました。

集まった人たちは、それぞれのお弁当やおかずを広げながら、近況を話したり、持ってきたものを見せ合ったりして過ごしました。テーブルの上には、家で作ってきたおかずや、いつものお昼ごはんが並びます。豪華な料理を用意する会ではなく、ふだんの暮らしを少しでも持ち寄るような時間でした。

「それ、おいしそうですね」

「これは家で作ってきたんです」

そんな何気ないひと言から、少しずつ場がほぐれていきます。初めて同じテーブルに座った人とも、ごはんを前にすると、少し話しやすくなる。食べものの中から、暮らしの話へ。近況の話から、まちの話へ。会話は大きなテーマを決めなくても、自然と広がっていました。

ラジオで配信中!!

ランチ会のあと、「山城ガスセンターいづつや」の福井幸さんにお話を伺いました。目的がなくても立ち寄れる場所を、まちの中にどう育てていくか。この日の空気の続きは、音声でもお楽しみください。



◀南加茂台
5丁目まちかどラジオ
ここから聴いてね。

用事があるから訪れるだけではなく、誰かと同じ時間を過ごすために立ち寄る。買い物でも、手続きでも、特別な参加でもない。ただ、同じ場所でお昼を食べることが、まちの中で顔を合わせるきっかけになる。
目的がなくても、ふらっと立ち寄れる場所があること。それは、暮らしの中で思っている以上に心強いことなのかもしれません。
この日のランチ会は、「山城ガスセンターいづつや」という場所が、まちの人の時間を受けとめていく、はじまりのような一日でした。

知らないまちに降りた朝

名前もまだ呼べないまま

ここで何ができるんだろう

問いだけが残っていた

弓を引いて音を出す

風の中に そーっと混ぜる

気づけば誰かが振り向いて

気づけば言葉が返ってくる

不安だったあの日々も

今は少し遠くて

このまちで鳴らした音が

私をここに 残してくれた



▷ 聴いてみてね



ながもの音

作曲：高田かなで（ながも音楽隊）

演奏：栗本幸音、高田かなで

撮影：矢崎 英夫（南加茂台在住）

座って過ごすだけじゃない。

「元氣な声が聞こえる、「ころばん塾」」



ころばん塾を訪ねると、中は思ったよりもずっと明るい雰囲気でした。音楽に合わせて足踏みをしたり、体操のかけ声があったり、その合間に笑い声が聞こえたり。介護施設と聞いて、私はどこかゆっくりとした時間が流れる場所を想像していました。でもここでは、みなさんがリズムよく体を動かしています。この明るさは、どんな人がつくっているのだろう。そう思い、高齢者の運動指導をしている濱野さんにお話を伺いました。

明るく笑顔があふれる中で
体づくりが行えるところで
「ほっ」としていただける
そんな場所を目指して
います♪
濱野 勇



介護予防教室「ころばん塾」

はまの いさむ
濱野 勇 さん

Born
紀宝町 きほうちょう 三重
▽
南加茂台 みなかもち 京都
Based

病気になる前に、
体を動かす

うらばなし
濱野さんの父は、
ロシア料理シェフ。

僕たちの会社は、もともとデイサービスから始まりました。デイサービスは、病気やけがをしたあとに、今の状態を維持したり、少しでも元の生活に戻れるように運動する場所です。でも社長には、「もっと早い段階から、運動の大事さを知ってもらいたい」という思いがありました。虫歯になってから歯医者に行くのではなく、虫歯にならないように歯磨きをする、ころばん塾の運動も、それに近いと思っています。病気になってからではなく、なる前に体を動かす、介護が必要になる前から、体を使う習慣をつくるのが大事です。

ころばん塾は、フィットネススタジオのような明るい雰囲気です。自分で座る場所を選んで、休憩時間になると椅子を動かして輪をつくって話し始める方もいます。そういう自由な動きがあるのも、僕はいいなと思っています。ここでは足踏みの音や音楽が聞こえ、いつもにぎやかです。

みんなと体操している時間が、
いちばん好き

僕の一日は、車でお客さまをお迎えに行くことから始まります。朝から来られる方をお迎えして、一緒に運動をして、昼に



持ち前のユーモアで一人ひとりに声をかけると、場には笑顔が広がります。



Instagram

Instagram では、日々の活動を動画でも発信中。
ころばん塾の明るい雰囲気や、ぜひ二次元コードからご覧ください！

お送りします。要介護の方はお昼ご飯もあります。午後からは、市の事業に参加される方もいますが、南加茂台の方が多いので、みなさん歩いて来られます。僕は、結構、運動づくしの毎日です。今の会社での運動指導を始めて、7年ほどになります。今は管理者なので、事務作業をすることもありますが、やっぱり僕がいちばん好きなのは、みなさんと一緒に体操している時間です。体操していると、みなさんイキイキしているんです。笑顔になるし、声も出る。それを見るのが何より好きです。ここに来る前は、ホテルの中にあるジムでトレーナーをしていました。ホテルなの

で、筋肉をつけるとか、余暇の時間に運動するという方が多かったと思います。そこから、だんだん「経験を生かして、体の不調や痛みを抱える人たちと一緒に、運動に取り組みたい」と思うようになり、運動に力を入れました。ころばん塾に来てみると、楽しい雰囲気です。自分を出せる場所だなと感じました。ただ運動と一緒に過ごすだけでなく、ちよとユーモアを入れたりします。お客さんから「おもしろいわ」と言われたり、伝えたことで体の調子が良くなったたりすると、やっぱり嬉しいです。僕は今やっていることが無駄じゃないんだと思っ

てもらえるような伝え方を意識しています。

仕事というより、生活の一部

僕は三重県の紀宝町で育ちました。三重県の最南端にある、陸の孤島と言われるような田舎です。小さい頃は、おじいちゃんおばあちゃんつ子でした。小学校の頃から大学生まで、ずっと学校の先生になりたいと思っていました。今は先生ではありませんが、「指導する」というところは少し似ていると思います。運動は、目に見えるものではありません。でも、伝えたことが少しずつ体に現れていく。そこが、この仕事の面白いところです。初めてころばん塾に来たとき、鏡張りでも明るく、体操している雰囲気も良かったです。スタッ

フがお客さまを楽しませようとしている感じも伝わってきました。7年ほどここで働いていますが、今は仕事というより、生活の一部になっています。この仕事がとても楽しいです。

ころばん塾は、運動をする場所ですが、それだけではなく、休憩時間には、笑顔で世間話をする声も聞こえてきて、人がつながっている感じがします。南加茂台だけではなく、いろんな地域の方にも来てほしいです。このまちに初めて来る人には、まずこう伝えたいです。

「めちゃくちゃにぎやかにみんなで運動している場所がありますよ」



介護予防教室

ころばん塾

ころばんじゅく

〒619-1127
京都府木津川市南加茂台
5-11-7

☎ 0774-76-2323

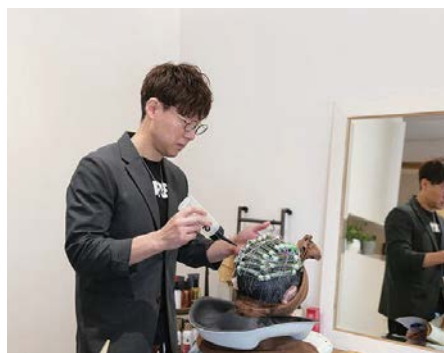
🕒 9:00～17:15

定休日 土・日曜日

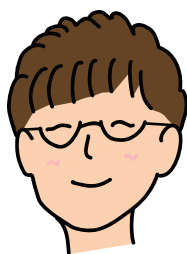
今日も、誰かが扉を開ける。

く南加茂台で、まちの人を迎える美容室く

9nine+one



少しの不便さを
楽しむ人生
塚本 高大



9nine+one (ナインプラスワン)

つかもと 高ひろ
塚本 高大さん

Born

船屋

京都



南加茂台

京都

Based

この場所で、店を始めた理由

僕は、加茂町の船屋で育ちました。幼稚園も、小学校も、中学校も地元。自分でも「めっちゃめっちゃ地元」だと思います。結婚を機に南加茂台に住み始め、気がつけば23年ほどになります。美容師になったのは、大学生の頃に、自分の働き方について考えたことがきっかけでした。電車に乗っているとき、仕事帰りらしい人たちの姿をよく見ていました。その中で、ふと「自分はこの先、どんなふうに住んでいきたいんだろう」と考えるようになったのです。自分で選んだ仕事を、自分の感覚で続けていきたい。そんな思いが、少しずつ出てきました。ちょうどその頃、友人が通っていた美容室のオーナーの話を知りました。一度会社員を経験したあと、美容師になった人でした。「そんな生き方もあるんや」そう思い、その人に会いに行きました。

うらばなし
髪も体も整える。
ジムではなく、
自宅で。



そこから美容の仕事に入り、二〇一三年、南加茂台で自分の店を始めました。当時、このまちには美容室があまりありませんでした。母親世代や父親世代の人たちが、遠くまで行かなくても、近くできれいになれる場所があったらいい。そう思ったことが、この場所で店を始める理由になりました。

住まいの下にある美容室。1階を店に、2階を住居にして、妻の奈々美さんと日々お客さんを迎えている。

髪を切るだけじゃない時間

店に来てくれるお客さんは、南加茂台に住む人たちが多いです。大きく宣伝をしているわけではなく、ほとんどが口コミで通ってくれています。今は、70代くらいのお客さんが多くなりました。車で移動することが難しくなってきた方もいるので、送迎もしています。家に



いる時間が長くなると、外へ出る機会 は少なくなります。けれど、美容室に 来ることで、少し気分が変わることがあ ると思うんです。髪を整える。鏡を見る。 少し話す。また家に帰る。それだけのこ とかもしれません。でも、その日一日の 気持ち、少し軽くなることもある。美容室に来ることが、気分を変える時間 になればいいなと思っています。

適度な不便さが、ちょうどいい

地域のつながりについて、考えること もあります。誰かが何かを始めたとき に、ちよつと応援する。できる範囲で、 何かをする。大きなことではなくても、 そういう関わりは地域に必要なのかな と思っています。南加茂台は、いいまち です。自然もあるし、住みやすい。でも、 何でもすぐに手に入る場所ではあり ません。車がないと移動しにくいとき もあります。それでも僕は、このまちの 適度な不便さが結構好きです。便利す ぎると、見えにくくなるものがあると思 います。少し手間がかかるからこそ、 送迎の時間に家族で話せたり、誰かに 声をかけるきっかけが生まれたりする。 そういう良さもあるのかなと思っています。

店の名前は「9nine+one」 です。10という完成された数字に対し て、少し足りない9に、1を足す。そん

な場所でありたいと思い、この名前を 付けました。僕の店は、絶対になくて は困る場所ではないかもしれませんが、 でも、「ちよつと必要だな」と思ってもら える場所でありたいです。髪を切るだ けではなく、気分を少し変える。外へ 出るきっかけをつくる。誰かが始めたこ とを、少し応援する。そういう「プラス 1」を、この場所から足していけたらと 思っています。

僕は今日もこの場所で、「プラス1」を 続けています。



美容院

9nine+one

ナインプラスワン

〒619-1127
京都府木津川市南加茂台
5-11-10

☎ 0774-76-6141

🕒 9:00~18:00 (予約優先)

定休日 月曜、第1・3・5火曜日



中田書店のせっちゃんに聞く、ながもだいはじまり

赤土の山に、
まちができていった

栗本 南加茂台ができた頃のことを教えていただけますか？

 南加茂台の造成が始まったのは昭和54年頃やったと思います。中田書店ができたのは、昭和57年でした。

最初は、赤土の山やったんです。そこに9丁目の方から、家がだんだん建っていききました。はじめはお店もほとんどなかったで、生活に必要なお店が、少しずつできていきました。

バスはぎゅうぎゅう。
働き盛りの人がくらすまち

栗本 その頃のまちの雰囲気は、どんな感じでしたか？

 ああ、もうにぎわってましたね。通勤、通学の人で、バスもいっぱいでした。5丁目のバスロータリーから、ぎゅうぎゅう詰めバスが出ていました。夕方になると、人がバースと降りてきはってね。朝と夕方は、ほんまに人が多かったです。当時は、30代、40代くらいの働き盛りの方が多かった



中田書店の「せっちゃん」。中田書店は、もともと加茂町船屋に本店があり、昭和57年に支店として南加茂台にもお店を構えた。現在は南加茂台のお店のみ営業中。営業日は、せっちゃんの気まぐれ。子育てをしながら店に立ち、学用品や学校で使うものを買いに来るこどもたち、お母さ



なかた せつこ
中田 節子 さん

昭和24年生まれ 取材時77歳

んたちを見守ってきた。日曜日にはゲームを楽しみにこどもたちが集まり、「おっちゃん」「おばちゃん」と声をかけて入ってくる場所でもあった。今でも、こどもの頃に通っていた人が大人になって顔を見せに来てくれる。南加茂台の成長と変化を、店先からずっと見つめてきた。

んちゃうかな。大阪へ出勤してはる人も、結構いました。加茂町の船屋の方は、昔からのまちという感じでした。でも南加茂台は、新しくできたまちという雰囲気があつて、少し都会的な感じもありましたね。いつべんに人口が増えたので、とてもにぎやかでした。それからしばらくして、こどもたちもあつという間に増えました。南加茂台ができて10年あまりで、小学校はマンモス校になりました。保育園も、第一と第二がありましたよ。

商店街には、
くらしがそろっていた

栗本 商店街も、今とはずいぶん違っていたんですね。



そうですね。最初の頃は、まだ家もそこまで建っていなかったで、お客さんは少なかったと思います。売り上げ的には、なかなか大変な時期もあつたんちゃうかな。でも当時は、若い世代や子育て世代が多かったで、「新しくできたまちには本屋さんが必要や」という時代背景がありました。中田書店の隣には、理容室と薬局

がありました。喫茶店、サイクルショップ、おもちゃ屋さん、クリーニング店、お花屋さん、食堂、タバコ屋さん、中華屋さん、写真館。お好み焼き屋さんもありましたね。内科や歯科医院もあつて、暮らしに必要なものが、商店街の中にそろっていました。安心で安全で、街並みもきれいで栄えていました。

「おっちゃん」と
こどもたちが来る場所

栗本 当時の中田書店は、まちの人たちにとって、どんなお店だったんですか？



溜まり場というよりも、店主のおっちゃん（主人）が、一人ひとりとやりとりをするようなお店でした。おっちゃんの人柄もあつて、こどもたちがよく集まってきました。小さい子でも、「おっちゃん」って言って来ていましたね。おっちゃんは、こども目線で話していました。

栗本 こどもたちに好かれていたんですね。





そうですね。こどものことを、よう見ていたんやと思います。日曜日の朝になると、こどもたちがフーッと集まってきました。みんな店の前で待っているんです。50円を入れて、レアなカードを集めるカードゲームがあつてね。それが、日曜日のこどもたちの楽しみでした。今は、それぞれの家でゲームをすることが増えましたけど、昔はみんなで店の前に集まって遊んでいました。けん玉、ヨーヨー、ゲイラカイト。お店の中でヨーヨーをして遊んでいる子もいましたわ。

変わっても、残っているもの

栗本 そこから、まちの雰囲気も変わってきたと思うのですが、今はどんなふうに感じていますか？



ああ、もう変わりましたね。ほんとうに変わりました。団地のまちというのは、はじめにうわーと膨らんでいくんですね。当時30代、40代だった親世代がいて、そのこどもたちがいて。まち全体が、成長していく時期がありました。それから40年あまりが経って、こういうまちになっていくんやなと思います。はじめは成長するまち。次は成熟するまち。そして、だんだん高齢化していくまちではないのではないか、と思います。



栗本 今回の「ながものがたり」のテーマを、「派手じゃないけど、地味にいい」で考えています。このまちのいいところは、どんなところだと思いますか？



そうやなあ。いっぱいありますね。うちの本屋に来る人は、もともと本が好きの人や、本屋の雰囲気が好きの人が多かったんやと思います。その中で印象に残っていることは、「おばちゃん、私、将来本屋さんになりたいねん。私でもできるんやろか」って言うてる子がいたことです。最近では、小学生だった子が、30年ほど経って、また「おばちゃん」って言って帰ってきてくれることもありました。こどもの頃に通った本屋に、また戻ってきてくれる。そういうときは、ほっとして、ええなあと思いますね。

栗本 昔と変わらず、今も残っているものはありますか。



高齢化したなと思います。でも、今でも「おばちゃん」って言うて入ってくるこどもがいます。昔に比べたら、ほんまに少なくなりました。でも、小学生が来てくれるんです。「卒業式やった」とか、「中学校の入学式やった」とか、報告しに来てくれる子もいます。

栗本 成長を見送る場所でもあるんですね。



そうですね。本屋という場所です。こどもたちが大きくなっていくのを、ずっと見てきたんやと思います。この45年間、本当にたくさんの方との出会いがありました。私たちも、まちのみなさんに育てていただいたように思います。改めて、感謝しています。私はもう年を取ってしまいました。が、これからの若い方々に幸あれと思っています。

南加茂台は、赤土の山から始まった。家が建ち、バスに人があふれ、商店街には暮らしに必要なお店が並び、こどもたちは日曜日の朝に本屋へ集まった。そのにぎわいは、今では少し遠い景色になったのかもしれない。それでも、かつて「おっちゃん」「おばちゃん」と呼んでいたこどもたちが、大人になってまた顔を見せる。今の小学生が卒業式や入学式を報告しに来る。まちは変わる。けれど、まちの中にあつた人とのつながりは、形を変えながら残っている。中田書店は、南加茂台の成長を見てきた場所だった。そして今も、誰かの記憶の中で、あの頃の商店街の明かりを灯している。

ここは、木津川市・南加茂台。



やサークル活動がおこなわれ、地域の中には穏やかなつながりが続いています。

私はこの南加茂台を拠点に、「ライティング・コミュニケーター」として活動しています。地域おこし協力隊の一員として、まちの出来事を伝えるだけでなく、人の思いや日々の風景に耳を傾け、その言葉を自分なりに受け止めて発信しています。

木津川市は、京都府の最南端に位置するまちです。奈良時代には一時的に都・恭仁京（くにきょう）が置かれた歴史があり、今も名残が地名に残っています。一方で、新しいまちづくりも進みます。古いものと新しいものが調和する場所でもあります。

その木津川市の南東部にあるのが、南加茂台（ながもだい）です。昭和54年から開発されたニュータウンで、これまでの約45年間に多くの人が移り住み、現在は約5千人が暮らしています。高齢化が進むなかでも、公民館では講座

与えられたミッションは「南加茂台の情報誌をつくり魅力を発信すること」。けれど、単なる情報誌ではなく、このまちで暮らす人の物語を届けたいと思い、「ながものがたり」という名前をつけました。「南加茂台（ながもだい）」で暮らす人たちの「物語（ものがたり）」を、取材や交流を通して紡いでいく。私は、誰かの当たり前に価値を見つけることを大切にしています。

『ながものがたり』が、読んでくださる方にとって、自分のまちのまだ知らない魅力を発見するきっかけになればうれしいです。

ちびとびと まんが

呪文対心

夕方なると、公民館の外には、小学生があそびにくる。



編集後記



▷南加茂台5丁目ましかどラジオ収録の様子

【公式】Instagramで
日々の活動を投稿中！



今回の「ながものがたり」も、まちの人に力を貸していただきながら作った一冊になりました。

表紙撮影は、南加茂台公民館で活動されている「いづみ写生クラブ」の徳安さんをお願いしました。第3号の「ながもの音」の撮影でもお世話になり、その写真がとても素敵だったことから、今回もお願いしました。ころばん塾のスタッフさんにもご協力いただき、撮影場所や構図を一緒に考えながら表紙ができあがりました。

今回の「ながもの音」では、私自身も演奏に参加しました。「南加茂台5丁目ラジオ」は、イベントの直後に収録し、まちの人と一緒に企画した時間や、その場で生まれた会話を誌面につなげることができました。

この情報誌が、南加茂台にいる人たちの生き方や思いを、少し近くに感じるきっかけになればと思います。

栗本